広報

中部の森林（もり）

写真：宝剣岳と登山者（南信署・木曽署管内）
（デジタル森林紀行テーマ「白」〈白い風景〉より）

私の森語り「山林が支える日本酒文化」
杉玉の高林　熊崎 惣太

各地からの便り
・アファンの森財団との植樹イベント　ほか

シリーズ
・森林官からの便り、私の森語り、
中部の保護林、秘蔵写真・今は昔の林業

国民の森林・国有林
林野庁中部森林管理局

2025/No.251

「森の生き物たちも棲みやすく！」アファンの森財団と植樹イベントを開催

【北信森林管理署】

十一月十六日、長野県信濃町（しなのまち）の霊仙寺山（れいせんじやま）国有林内において、当署と一般財団法人「C.W.ニコル・アファンの森財団」の主催による植樹イベントを開催しました。

このイベントは、「想像しよう百年後の森を。ふるさとに未来の森を作ろう。」という趣旨のもと開催したもので、信濃町や長野森林組合等の関係団体、地元や県内外の一般参加者など約百二十名が参加しました。

親子で植樹作業に参加

お子さんを背負って作業する参加者

会場は同財団が管理するアファンの森に隣接しており、参加者は、当署職員や長野森林組合職員のアドバイスを受けながら唐鍬やスコップを使い、ブナとトチノキの苗木約五百本を植樹しました。

このエリア全体では、スギ五千五百本のほか、ミズナラやケヤキ、カツラ等の広葉樹五千五百本を植栽し、森の生き物たちも棲みやすい多様な森林づくりを進めていきます。

また、植樹イベントに先立ち、十一月十五日、同財団の理事長森田いづみ氏と当署署長が「国民参加の森林づくり協定」における「遊々（ゆうゆう）の森」活動の協定を締結しました。「遊々の森」は、森林環境教育の推進を目的とした森林教室、自然観察、体験林業等の活動を行うフィールドです。

協定箇所は、植樹イベントを行ったエリアのほか、これまで間伐などの森林整備活動を行う目的で協定を締結していた「社会貢献の森」から変更した区域をあわせ、全体で約三十二ヘクタールになります。

協定書を手にする森田理事長（右）と林署長（左）

今後、企業や一般の方々が、木々を育てる作業を体験しながら学ぶフィールドとして利用されることを期待しています。

また、地域の森林づくりや、生物多様性の保全への意識の醸成に繋がるような、様々な活動の場としても、大いに活用されることを願っています。

植樹作業後に記念撮影

原木の有利販売に向けた検討会を開催

【名古屋事務所】

十二月三日、原木の有利販売に向けた検討会を開催し、各署等から資源活用・販売担当者及び若手職員ら三十名が参加しました。

この検討会は、木材の流通や市況動向、有利販売に向けた採材・選木等の知識の向上を目的に、原木市場の御協力を得て実施しました。

午前中は、㈱小林三之助商店（こばやしさんのすけ）各務原（かかみがはら）営業所を見学し、広葉樹の需要や市場での取引等について学んだ後、はい積みされた様々な広葉樹の原木を見ながら、用途や購入者が評価するポイントなどについて参加者からの質疑を交えながら解説いただきました。採材については、一般的に枕木（まくらぎ）の長さが二メートルのため二・一メートルで流通しているが、需要は様々であり、長さに決まりはなく、長材に採材する場合は通直な材とすること、また、すぐに出材できないものは変色防止のため日当たりを避けて保管するなどのアドバイスがありました。

午後は、幅広い木材を取扱う㈱東海木材相互市場大口（おおぐち）市場へ移動し、近年の市況や需要に対応した販売戦略等について説明を受けた後、原木市場を見学しました。購入者を想定した仕分けやはい積みを行うことで購入しやすく、かつ付加価値が付くよう工夫している取組や、高値が付くヒノキの特長や欠点の見方など、質疑を交えながら説明を受けました。

検討会を通じ、市場で実際に原木を見ながら、付加価値をつける取組等について意見交換を行うことにより、各署等の生産・販売業務の参考になることを期待します。

広葉樹の採材等について説明を受ける参加者
（一番左はクスノキ、残り4本はケヤキ）

冬の森林教室を実施しました！

【中信森林管理署】

十二月十二日、松本市堀米（ほりごめ）保育園の園児十九名を当署に迎えて冬の森林教室を実施しました。

最初に署長から、クリスマスの由来や北欧の森の暮らし、トナカイについて説明し、次に職員がどんぐりを手に取って、クマの好物であること、リスなどにより遠くまで運ばれて芽生えることで、その生育範囲が広がっていくことなどをクイズ形式で学びました。

クイズの後は、「ほりごめの木」と題して、模造紙に描いた太い幹の周りに、葉の形に切った色とりどりの折り紙を自由に貼り付けました。園児達は、寒い冬の後に訪れる春をイメージして、似顔絵や好きなキャラクターなど描いた折り紙の葉を模造紙に貼り、全員で「ほりごめの木」のできあがりを楽しんでいる様子でした。

続いての輪投げゲームでは、床の上に置かれた鹿の角をターゲットに、「蔓（つる）の輪」を苦戦しながら何度も投げ、輪が上手に入った時に顔を綻ばせる様子が印象的でした。

最後は、「世界に一つだけのクリスマスツリー作り」に挑戦です。松ぼっくりを、煌びやかなビーズや雪に見立てた綿で飾りつけるのですが、園児たちは大切な家族に見せるため作成に夢中となり、職員も一緒になって森に親しむ楽しいひと時となりました。

今後も、幼児期から森林に親しみを持ってもらうための様々な取組を継続してまいります。

完成した「ほりごめの木」と一緒に

～民国連携の取組～ ニホンジカ食害防除対策の現地検討会を開催

【森林技術・支援センター／岐阜森林管理署】

十二月十日、岐阜県七宗町の神渕コミュニティセンター及び七宗国有林において、ニホンジカ食害防除対策の現地検討会を開催しました。

ニホンジカによる森林被害は民有林・国有林の区別はなく、再造林や適切な森林整備の実施に支障を及ぼしています。また、樹木の剥皮による天然林の劣化や、下層植生の食害等により山地災害発生の危険性が増す等、地域全体の森林が持つ公益的機能の発揮にも大きな影響を与えています。

こうした中、岐阜森林管理署では、防護柵の設置や、くくり罠による職員捕獲の実施などのニホンジカ被害対策に取り組んでいます。

本検討会は、このような取組について、地域の林業関係者と情報共有を図り、意見交換を行うことにより、岐阜県内でより効果的な対策を行うことを目的としています。森林技術・支援センターと岐阜森林管理署が合同で開催し、本年度は、岐阜県及び市町村の担当者、資材メーカー等から五十一名が参加しました。

岐阜県森林研究所　片桐主任研究員の講義

午前は、神渕コミュニティセンターにおいて、岐阜県森林研究所の片桐主任研究員を講師に迎え、「ニホンジカ対策の現状と課題」と題して講義が行われました。講義は、ニホンジカによる森林被害の状況、主な食害防除対策である忌避剤散布、ツリーシェルター、シカ柵の特徴や効果のほか、ツリーシェルターの種類の違いによる苗木の成長に及ぼす影響など、被害対策に取り組むうえで大変参考となる内容でした。

続いて、当局職員から、「中部森林管理局の取組について」と題して林野庁職員（小林正典氏）が考案した「小林式誘引捕獲法」の紹介や、職員捕獲、委託による捕獲、ブロックディフェンスとくくり罠捕獲について説明を行いました。

センサー付き囲い罠「みはるちゃん」の説明

午後は、七宗国有林の七宗町上麻生地区森林共同施業団地内にある「獣害対策展示エリア」に展示している箱罠や囲い罠、防護柵、単木保護資材を視察し、メーカー担当者から説明を受けた後、参加者間で意見交換を行いました。

また、小林式誘引捕獲法の実演等も行い、参加者にも実際に設置方法を学んでもらいました。

小林式誘引捕獲法の説明と実演

ニホンジカ被害対策では、防護（守りの対策）と捕獲（攻めの対策）の両方を効果的に組み合わせて取り組む必要があり、今後も検討会等を通じて民有林・国有林の関係者が情報を共有し、一体となった対策を着実に推進していくことが重要だと考えています。

広葉樹二次林の施業・利用に関する勉強会での講義を紹介します

【計画課・資源活用課】

一月二十七日、中部森林管理局職員を対象とした「広葉樹二次林の施業・利用に関する勉強会」を開催しました。

「広葉樹二次林」とは、過去には薪や炭を採取する薪炭林として主に利用されていたものの、エネルギー革命以降、現在では資源として利用されなくなった森林等を言います。中部局では、令和五年度の「広葉樹二次林の施業上の取扱いに関する検討会」のとりまとめを受けて、伐採方法や搬出の計画、樹種に応じた採材など、施業計画から木材生産に至る一連のプロセスに係る職員の知見を高めるために開催し、百二十名を超える職員の参加がありました。

広葉樹二次林
（北信森林管理署管内黒姫山国有林）

勉強会では、とりまとめの解説とあわせ、岩手県のノースジャパン素材流通協同組合理事長の鈴木氏から「近年の広葉樹をめぐる動向と利用の可能性について」と題して講義いただきました。その中から、広葉樹の用途や最近の需要など、身近に感じられる話題をご紹介します。

◆曲がりでも細くても使えます◆

トチやミズメ等は、漆器（しつき）の木地として漆器の大きさに木取りします。ホオノキは日本刀の鞘（さや）の曲がりにあわせて使用することがあります。オノオレカンバ（※）は最高級ソロバンの玉やピアノ細部に使用されるほか、高級スピーカーの部材にも使われています。

※斧が折れるほど堅いことから、この名前がついています。

出席者からの質問に答える鈴木氏

◆新たな用途など◆

サワグルミは環境に配慮したWPC（ウッドプラスチック）の素材やスノーボード等の材料となっています。かつて、床の間の柱に使用されていたエンジュはけん玉の材料となっています。シナノキは食品を包む経木（きょうぎ）として利用の可能性が広がっています。

◆薪の需要はストーブ以外にも◆

薪といえば、冬場の薪ストーブやキャンプ、アウトドアでの利用など季節が限定されるイメージがありますが、石窯でピザやパンを焼く際に利用されており、こちらは季節に関係なく年間を通して一定量の需要があります。

薪ストーブの利用が多い地域では、富山の置き薬のように、使用した分を補充する宅配サービスが行われていることもあります。

◆使える広葉樹は近くにも◆

燻製（くんせい）用のチップとしてサクラが有名ですが、リンゴも利用されます。栽培をやめたリンゴの木が廃棄物ではなくチップとして売れる場合があります。

最後に鈴木氏から、広葉樹の樹種に応じて様々な用途があり、チップとしてひと括りにせず、用途を見出せる眼や知識を習得することが大切であること、また、地域により求められる樹種が異なる場合もあり、ニーズの把握も重要であることを発信いただきました。

広葉樹二次林の施業上の取扱いに関する検討会はこちら↓

シリーズ 秘蔵写真

今は昔の林業

第46回

中部森林管理局総務課
井上（いのうえ） 日呂登（ひろと）

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「裏木曽」その十

小谷狩②

水を利用しながら川の本流へ木材を運ぶ「小谷狩」の主役は運材担当の労働者である「日雇（ひよう）」です。日雇は伐採を担当する「杣（そま）」とは別の職種ですが、時代や地域により両方を兼ねるという人もあったようです。「杣」は単独で行う作業が多く最低限の技術を習得するのにも数年の修業期間が必要だとされますが、「日雇」は集団による作業であり経験が浅くとも一緒に働きました。

大正時代頃の木曽谷での日雇達による小谷狩風景。裏木曽でもこれに近い風景が見られたと思われる。

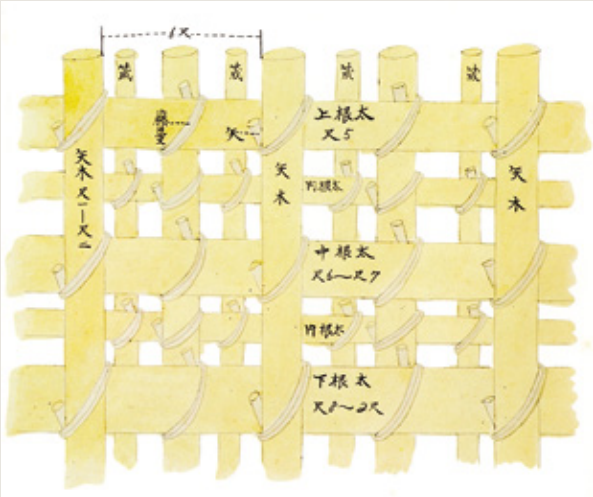
「日雇」は二十人程で一つの組となり「看板（かんばん）」と呼ばれる現場監督の指揮により、運材装置の設営と解体や、鳶口（とびぐち）や鳶竿（とびさお）（長い鳶口）やツルといった道具で木材を引っかけ小刻みに運ぶ運材作業を行いました。「看板（しんがり）」の中でも運材の先頭を指揮する「木鼻役人（きばなやくにん）」と殿で後片付けをしていく「木尻役人（きじりやくにん）」は「日雇」の中でも特に技術優秀な者が選抜されてなったそうです。「日雇」の世界では「看板」になることは経験と技術を持っている証であり名誉なこととされていた一方、責任の伴うものであり、病気で休んだり寒くても焚火にあたることができなかったという逸話があります。

大正時代初め頃、裏木曽の「日雇」のイメージ
（「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より）
ここで描かれているのは「看板」と呼ばれる役付きの現場監督達であり法被に役職名が見られる

なお、「裏木曽」である現在の岐阜県中津川市付知の出身である画家の熊谷守一（くまがいもりかず）氏は大正初期頃に付知川の上流域である東股（現在の東濃森林管理署管内・付知裏木曽国有林の辺り）で三年間程「日雇」として働いた経験があり、著書「へたも絵のうち」（昭和四十六年・日本経済新聞社）の中では往時の「日雇」としての経験談が語られています。

本格的な小谷狩は「大留（おおどめ）」と呼ばれる施設から始まります。大留は谷筋で夏・秋の急な出水で木材が下方までバラバラに流出しないように受け止める堅牢な施設であり、谷間で両岸が岩場である場所が選ばれました。他の運

「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より
運材を指揮する「看板」のイメージ（大正初期）



「大留」の構造図
（「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より）

裏木曽の「大留」のイメージ
（「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より）

材施設が一定の区切りで解体されるのに対して、大留は何年も使われるものでした。「山落とし」でも集めた木を集積・整理する場所である「留（どめ）」が設置されましたが（第四十三回参照）、大留はそれ以上に頑丈に造られ、急な洪水などで木材が一気に流出することを防ぐ防衛ライン的な役割を担っていました。ここでは「根太（ねだ）」と呼ばれる長さ一〇メートル程の太い丸太（ヒノキかミズメ）が渡され、川の両岸の岩に空けられた穴にはめ込まれます。「根太」は上中下の三段に傾斜をつけて置かれ、これに垂直縦方向の「矢（や）」と呼ばれる丸太が藤蔓（ふじつる）で頑強に結び付けられて補強されます。

この大留から一本ずつ材木が引き出されて下流へ流されていくことになりますが、これは概ね十月末から十一月初旬以降の大雨・洪水の少ない季節に入ってから行われるものであったようです。

木曽地域に残る「大留」の遺構。直径一尺四寸から二尺ほどの太い丸太を差し込むための岩に空けられた穴が残っている。／「木曽悠久の森」スマートフォン写真コンテストより優秀賞「大留めの遺構も秘めし悠久の森」

昭和初期の絵葉書より、当時まだ木曽に残っていたとされる「大留」の跡
（現在の木曽森林管理署王滝国有林氷ヶ瀬）
「根太」と思われる太い丸太が見られる

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。
これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むか～しの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、コードを読み込んでください。

シリーズ

森林官からの便り

国有林の現場の最前線で、働く森林官の仕事や、管轄する地域の特色などを紹介します。

【中信森林管理署
奈良井森林事務所
首席森林官　中島　和美】

奈良井森林事務所は、長野県中部に位置する塩尻市奈良井に所在し、楢川地区にある国有林約六、〇二七ヘクタールを管轄しています。

歴史を感じる町並みの奈良井宿

奈良井ダムからの茶臼山（2,652m）中央付近

楢川地区は、旧中山道の中程にある木曽路の北に位置し、関所が置かれていた贄川宿、木曽漆器の生産地である木曽平沢、歴史的な建物の町並みが保存されている奈良井宿があり観光名所となっています。六月には、木曽漆器祭・奈良井宿場祭が開催され、木曽平沢の大漆器祭と奈良井宿のお茶壺道中などのイベントに多くの観光客が訪れ賑わっています。木曽平沢の漆器販売では、掘り出し物の漆器を見つけることができるかもしれません。

国有林には、中央アルプス木曽駒ヶ岳の北にある茶臼山（二、六五二メートル）、塩尻市で一番高い山）を源とする奈良井川源流があり、下流にある奈良井ダムへと流れ、塩尻市・松本市の水源となっています。また、日本海側へ流れる奈良井川の水の一部を、農業用水として伊那谷へ運ぶ木曽山用水があります。毎年関係者が立会い、水枡の水量検査が行われています。

当事務所では主な業務として、成熟期を迎える人工林ヒノキやカラマツの主伐のほか、間伐による森林整備やコンテナ苗の植栽とその後の下刈、除伐等の保育作業を行っています。こうした事業の監督では、森林の多面的機能が効率的に発揮されることはもとより、安全第一に作業を進めることを考えながら業務を実施しています。

その他に貸付地の確認、境界巡視、計画的な森林整備のための調査などを行い、国有林の適切な管理に努めています。

■未来の担い手へのメッセージ

国有林には、地域によって様々な特徴を持つ森林がありますが、それらは長い年月をかけて多くの人の手により守り育てられてきたものです。

この国有林を未来へ繋いでいくため一緒に仕事をしませんか。

事務所前にて

シリーズ

「私の森語り」

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に挑戦されている方の取組を紹介します。

「山林が支える日本酒文化」

杉玉の高林

熊崎 惣太

■自己紹介

東京農業大学を卒業し、東京で二十年間過ごしたのち、三十九歳で地元の岐阜県下呂市へUターンしました。

実家は屋号を「高林」と言い、代々林業を家業としていました。現在は、林業としてはかつてのような経営は成り立たなくなりましたが、父親が四十年前に始めた「杉玉づくり」を、Uターン後の生業のひとつとし、その規模を少しずつ広げています。

■活動内容

「杉玉（すぎだま）」とは「酒林（さかばやし）」とも言われ、酒蔵の軒先に飾られる縁起ものです。その年の良質な酒造りや商売繁盛を祈念するとともに、地域の平穏を願って、毎年十一月～十二月の新酒の搾りが始まる時期に、新しいものに交換することが習わしとして知られています。新しい杉玉は鮮やかな緑色が特徴で、新酒ができたことを表すサインにもなっています。

鮮やかで質の良い杉葉が大量に必要となります。

杉は常緑樹なので、年間を通じて杉玉を制作することができるのですが、酒蔵では全国各地で同時期に杉玉を取り換えるので、年末年始の制作スケジュールはかなりタイトになります。ですから、この時期は体調管理に気を付けるとともに、納期に間に合わせるプレッシャーと闘う毎日が続きます。

受注量を少しセーブしたいところですが、杉玉の作り手が全国でも少ない中で注文をいただくので、今はできる限りお受けして、なんとか乗り切っている状況です。とは言っても、体力仕事なので、いつまでもできるわけではありません。これから先は、作り手を育てていくことにも注力していきたいです。

昨今は酒蔵だけでなく、飲食店や酒販店、日本酒のイベントなどからの引き合いも増えており、私たちが作る杉玉の六割程度が飲食店での利用です。とくに東京圏からの注文が多く、杉玉のデザイン性や趣が受け入れられていることを実感しながら、日々制作に励んでいます。

酒蔵に飾られる直径80㎝杉玉の重量は約50kg

■メッセージ

先にも書きましたが、今後も安定的に杉玉を届けるためには、若い作り手を増やさなければいけません。しかし年間を通じて雇用できるほどの売り上げがあるわけではないので、積極的に担い手を育てることができません。ですから、例えば「夏は農業、冬は杉玉」のように仕事と人材をシェアしあえる仕組みができないかと思案しています。また、冬の繁忙期は杉の葉が大量に必要になるので、間伐などで伐採された杉の葉の買い取りも行っています。杉玉づくりも林業の一端として、少しでも業界の雇用や収益につながればと考えていますので、関心のある事業者や個人の方がいらっしゃいましたら、ぜひ連絡をいただきたいと思います。

東京で開催された日本酒イベント
〈クラフトサケウィーク2024〉にて
直径３ｍの杉玉モニュメントを監修・制作

■連絡先

岐阜県下呂市萩原町奥田洞４６３－１
杉玉の高林　TAKABAYASHI

シリーズ 中部の保護林（第46回）

樹林が縞状に枯れる珍しい山

八ケ岳縞枯山（しまがれやま）希少個体群保護林

設定目的

「縞枯」と呼ばれる、樹木が集団で帯状に枯れていく珍しい現象が見られる縞枯山（二、四〇三メートル）に設定されています。この縞枯山のシラビソを主体とし、コメツガ、トウヒ等の混交する天然林個体群の保護・管理をしています。

縞枯現象についての調査研究は多数行われており、発生の原因にはいくつもの要因がありますが、斜面を一定方向に吹き抜ける風（卓越風（たくえつふう））による影響が一番の原因とされています。

地況・林況

八ケ岳連峰の北部に位置し、北に横岳、南は茶臼山に連なり、火山活動の噴出物で形成された山です。縞枯は二、二〇〇メートル付近から山頂まで現れます。

所在地
長野県茅野市

国有林野には、世界自然遺産を始めとする原生的な森林生態系を有する森林や、希少な野生生物の生育・生息の場となっている森林が多く残されています。

国有林野事業では、1915年（大正4年）以降、こうした貴重な森林を「保護林」として設定し、森林や野生生物等の状況変化に関する定期的なモニタリング調査を実施して、森林の厳格な保護・管理を行っています。

お問い合わせ先：計画保全部計画課　ダイヤルイン：026-236-2612

※詳細は、コードを読み込んでください。

国有林野事業業務研究発表会開催
中部局二課題が最優秀賞を受賞

【技術普及課】

十二月十四日、林野庁にて国有林野事業業務研究発表会が開催され、全国七か所の森林管理局から職員が一堂に会し、各現場で創意工夫しながら取り組む技術開発や試験研究の成果が発表されました。

当日は、「森林技術部門」九課題、「森林保全部門」六課題、「森林ふれあい・地域連携部門」三課題の計十八課題の発表が行われ、中部局からは、昨年度の中部森林技術交流発表会で優秀賞を受賞した東濃森林管理署の「真砂土地域に適したシカ被害防止対策の試み」（森林保全部門）と、愛知森林管理事務所の「受け流す柵で減災～逆転の発想で早期に復旧」（森林技術部門）の二課題がエントリーしました。

両課題は、各部門で着眼点や普及性などの観点から多数の審査委員による高い評価を受け、その結果、いずれも林野庁長官賞（最優秀賞）を受賞することができました。

また本発表会は、審査委員による審査とは別に、国有林野事業に携わる各局・署の職員が現場業務の目線で投票する「職員が選ぶ業務研究大賞」も設けられており、こちらでも愛知森林管理事務所の課題が選ばれ、ダブル受賞の快挙となりました。

受賞者らによる集合写真

受賞課題の内容は、こちらをご参照ください。

中部の森林
令和６年２月号

デジタル森林紀行
「白の風景」へご来訪ください

デジタル森林紀行（デジ森）では、風景の色をテーマに写真を「青」「緑」「黄」「白」の四つに分類して掲載しています。冬季の「迫力ある白」や「青空とのコントラストが際立つ白」といった風景の数々をご自宅でお楽しみいただけます。また、デジ森では読者のみなさまからの写真投稿もお待ちしております。

デジ森「白の風景」は
こちらから↓

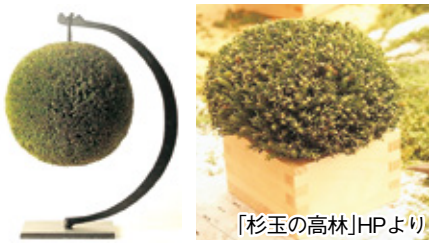
デジ森「白の風景」23 能郷白山2

編集長だより

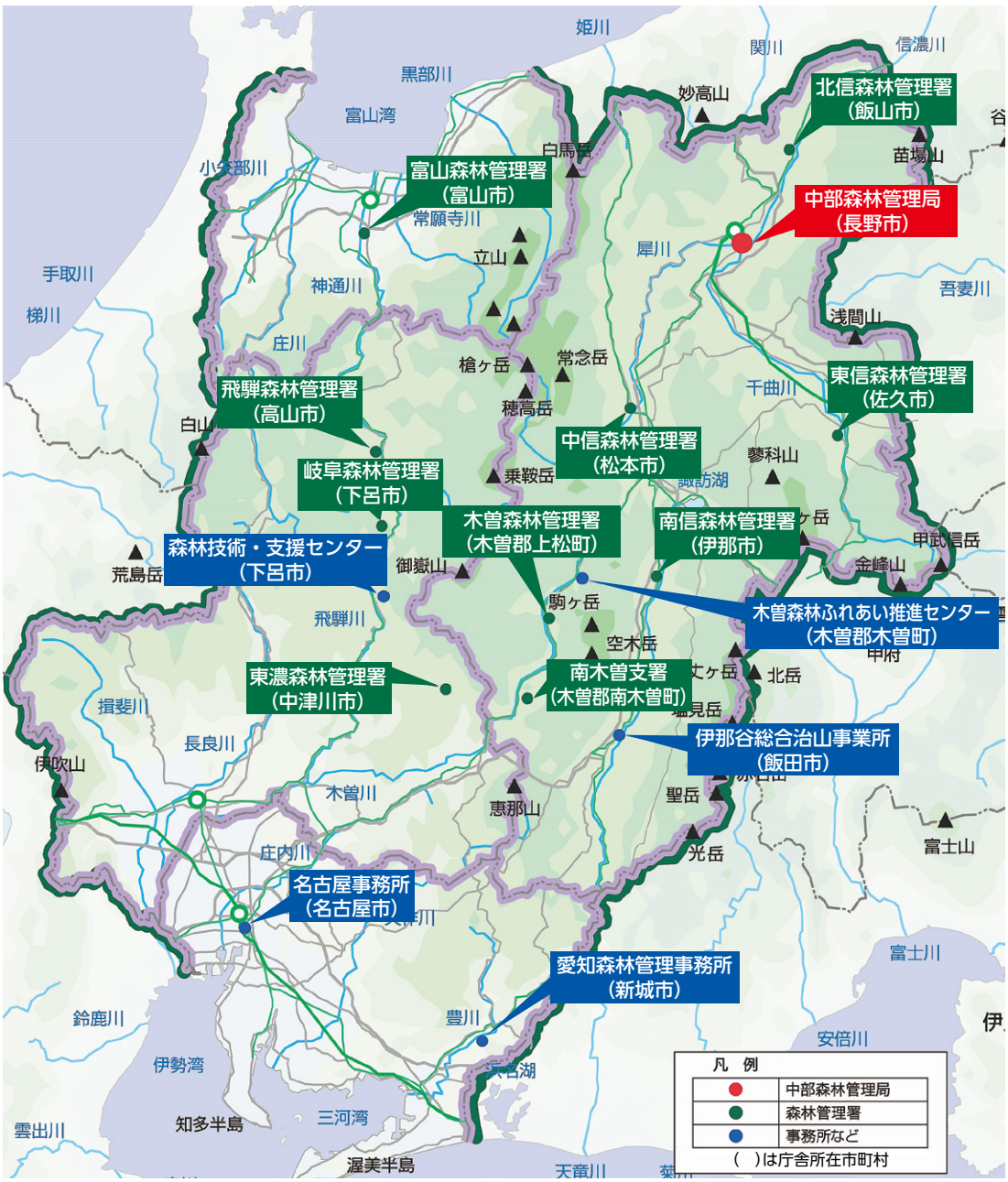
（中部の森林へのご意見・ご要望等の投稿は、migoro@maff.go.jp まで電子メールでお送りください。）

♪雪やこんこ、あられやこんこ♪これは雪を歓迎する歌ですが、今季の雪の降り方は歓迎できそうもありません。ここ何年かで耳にするようになったJPCZ(日本海寒気団収束帯)は日本海側を中心に短時間で大量の雪を降らせて交通や生活に影響を及ぼしています。雪解け水は春からの農作業に欠かせないので雪が降らないと困るのですが、ドカ雪と呼ばれるような極端な降り方は遠慮したいものです。

上述の２番の歌詞は「犬は喜び庭駆け回り、猫はコタツで丸くなる」ですが、雪の日に街中で見かける犬は尻尾を下げて仕方なさそう？に歩いています。彼らも寒いのはイヤなのでしょう。猫がコタツで丸くなっているかどうかは確認していません。


「杉玉の高林」HPより

「私の森語り」でご紹介した「杉玉の高林」さんでは、室内に飾る杉玉（写真左：直径30㎝）も制作されています。また、杉玉作りを体験できる「すぎぼん」（写真右）のワークショップも行われています。一合枡に杉の葉を挿してハサミで形を整える「すぎぼん」、何だか楽しそうです。



中部森林管理局のホームページ等へのアクセスは、以下を読み込んでください。

中部森林管理局
ホームページ

広報
「中部の森林」

用語の解説

本誌文中に掲載している主な専門用語・業界用語を解説。

名古屋事務所	〒456-8620	愛知県名古屋市熱田区熱田西町1-20	TEL 050-3160-6660	c_nagoya@maff.go.jp
富山森林管理署	〒939-8214	富山県富山市黒崎字塚田割591-2	TEL 050-3160-6080	c_toyama@maff.go.jp
北信森林管理署	〒389-2253	長野県飯山市大字飯山1090-1	TEL 050-3160-6045	c_hokushin@maff.go.jp
中信森林管理署	〒390-0852	長野県松本市島立1256-1	TEL 050-3160-6050	c_chushin@maff.go.jp
東信森林管理署	〒384-0301	長野県佐久市臼田1822	TEL 050-3160-6055	c_tohshin@maff.go.jp
南信森林管理署	〒396-0023	長野県伊那市山寺1499-1	TEL 050-3160-6060	c_nanshin@maff.go.jp
木曽森林管理署	〒399-5604	長野県木曽郡上松町正島町1-4-1	TEL 050-3160-6065	c_kiso@maff.go.jp
南木曽支署	〒399-5301	長野県木曽郡南木曽町読書3650-2	TEL 050-3160-6070	c_nagiso@maff.go.jp
飛騨森林管理署	〒506-0031	岐阜県高山市西之一色町3丁目747-3	TEL 050-3160-6085	c_hida@maff.go.jp
岐阜森林管理署	〒509-3106	岐阜県下呂市小坂町大島1643-2	TEL 050-3160-6090	c_gifu@maff.go.jp
東濃森林管理署	〒508-0351	岐阜県中津川市付知町8577-4	TEL 050-3160-5675	c_tohno@maff.go.jp
愛知森林管理事務所	〒441-1331	愛知県新城市庭野字東萩野49-2	TEL 0536-22-1101	c_aichi@maff.go.jp
森林技術・支援センター	〒509-2202	岐阜県下呂市森876-1	TEL 050-3160-6095	c_gijutsus@maff.go.jp
木曽森林ふれあい推進センター	〒397-0001	長野県木曽郡木曽町福島5473-8	TEL 0264-22-2122	kiso-fureai@maff.go.jp
伊那谷総合治山事業所	〒395-0001	長野県飯田市座光寺5152-1	TEL 050-3160-6075	

発行：林野庁 中部森林管理局
編集：総務課 広報
〒 380-8575 長野県長野市栗田 715-5
電話：026-236-2531
Mail：migoro@maff.go.jp
http://rinya.maff.go.jp/chubu/

メールマガジンに登録いただくと、広報「中部の森林」を発行日と同時にデジタル版を毎月配信します。
（毎月 10 日発行※編集の都合で、発行日が遅れることもあります）
登録サイト https://mailmag.maff.go.jp/m/entry

本誌に使われている紙は、日本の森林を育てるために間伐材を積極的に使用しています。